

森を再生する会 会報

2015年 4月25日
NPO法人 森を再生する会

水源の森を守ろう！ 取り戻そう！

目次

・森づくりを考える	
水源の森づくりと分収育林はどう違うか	・2014年 納庫の山作業状況報告 ・4P
..... 1P	・面の木峠の観察会に参加して..... 5P
分収育林の現状	・面の木園地観察会に参加して..... 6P
..... 2P	・26年度の寄付者..... 7P
・平成26年度の主な事業..... 2P	
・照葉樹林が育てた「ユネスコエコパークの町」	
のお話..... 3P	

森づくりを考える

1、「水源の森づくり」と「分収育林」はどう違うか？

理事長 神谷 輝幸

水源の森は、貯水能力が抜群の原生的な森(主に広葉樹で覆われた山)で人間が手を入れなくて良い山です。たとえば、東北白神山地のブナの原生林、鹿児島県屋久島の原生林、宮崎県綾町の広葉樹林が有名です。

分収育林は昭和30年代に国が始めたスギ・ヒノキの育林事業です。国有林を行政や民間で出資して、収益を出資者で分けるというものです。



宮崎県綾町 照葉樹林 ↑

水源の森づくりと分収育林では目的が違います。したがって、森づくりの方法も違います。水源の森づくりは自然にまかせますので、原則手入れが不要です。費用もかかりません。

一方、分収育林では、建築材として育てるために、間伐や枝打ちなどの手入れを定期的に行わなければならない。当然、手入れの費用も相当かかります。

大切なことは、「水源の森づくり」も「分収育林」も対立するものではなくて、むしろ共存すると考えるほうが正しいのです。

山で手入れをしていけばすぐ理解できることですが、林道があり、なだらかな山で、樹木の成長が早い、標高800メートル以下の山は分収育林など人工林として適切な管理を施し、建築用材を育てればよいのです。

一方、標高800メートル以上の急峻な山は、作業もしにくく、林道もついてないため、手入れの必要のない生態系豊かな水源の森として保全していくことが重要なことです。



手入れをして下草が生えている分収育林↑

2、「分収育林」の現状

右の写真は、愛知県北設楽郡設楽町の国有林（分収育林）です。昭和30年代に植えられたスギの木が、間伐や枝打ちもされないまま、無残にも重機で丸坊主に伐採されました。新城市にある愛知森林管理事務所で、どうしてこんなにひどいことをするのか聞いてみました。分収育林の法律では、借り受けて手入れしていた人が高齢で作業ができないから国に返すこと申し出ると、伐採せざるを得ないのです。



この後どうするのか尋ねますと、驚いたことに、またすスギを植えるのだそうです。

(文責：神谷輝幸)



平成26年度の主な事業～あいち森と緑づくり事業補助事業～

[1、面ノ木峠自然観察会&撮影会]

日時：平成26年8月24日

8:00～16:00

場所：愛知県北設楽郡設楽町面ノ木原生林

参加者数：39名





参加者が撮影した写真を展示

[2、植樹&巻き枯らし間伐体験]

日時：平成26年10月26日 8:00～16:00

場所：愛知県北設楽郡設楽町大字西納庫下山17番地 本会所有の山林

参加者数：35名



「照葉樹林が育てたユネスコエコパーク綾町」のお話

照葉樹林文化を守り育てる宮崎県綾町

宮崎県・綾町の照葉樹林文化推進専門監の河野耕三さんが「照葉樹林が育てたユネスコエコパークの町」と題してNHKラジオ深夜便で話された内容の概要を紹介します。

「照葉樹は、常緑広葉樹のひとつです。その昔、照葉樹林は日本を広く覆い、人々の生活と深くつながっていました。

しかし開発などによって、照葉樹林は私たちの前からだんだん姿を消していきました。今では日本の総森林面積の1.2%にしか過ぎません。そんな時代に、宮崎県綾町には、2,000haの照葉樹林が広がっています。ここは日本最大の照葉樹林帯なのです…

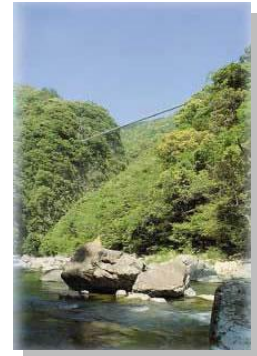
私たちが失ってしまった照葉樹林の姿が、ここには残されているのです。植物のほかに

も、たくさんの生き物が暮らしています。この森を生息南限とするニホンカモシカ、絶滅危惧種のクマタカやヤイロチョウ、九州で初めて生息が確認されたクロホオヒゲコウモリ、南九州とアメリカテキサス州にだけ発生するキリノミタケ…。私たちの身近な生き物から、なかなか会えない珍しい生き物まで、たくさんの命が息づいています…

私たちの住む日本から東アジアに広がる照葉樹林帯には、共通の文化がたくさんあります。照葉樹林の恵みはその起源と言われ、「照葉樹林文化」と呼ばれています。大豆発酵による納豆や味噌・醤油、魚の姿寿司を自然発酵させて作るナレズシ、水さらし法であく抜きをしたクズ粉やワラビ粉、そしてコンニャク。サトイモやヤマノイモ（ナガイモ）が栽培され、モチ米、モチアワ、モチキビなどの粘り気の多い種子澱粉をもつモチ種も共通に分布しています。

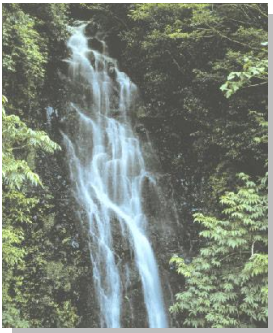
めでたい時には赤飯、餅、甘酒をふるまう習慣も同じです。食物以外でも、野生の繭から作る絹の利用、ウルシの木などからうるしをとって漆器を作る技術も照葉樹林帯が発祥の地です』

そして、この照葉樹林が残されている宮崎県綾町を含む一帯が、昨年ユネスコエコパークに登録されました。



今も続く人工林から照葉樹林への復元の営み～宮崎県綾町～

スギやヒノキの人工林の間伐等を行い林内に光りを多く入れることにより、かつての照葉樹林の林相を残す天然林からの種子の供給で照葉樹を自然発生させ、この照葉樹が十分育った頃、残るスギやヒノキを全て除去し、照葉樹林への復元を図っています。50～100年後には保護林と復元された区域により6,000ha以上の連続した広大な照葉樹林の復元を目指しています。



河野耕三さんをはじめ、綾町の人たちは、目先のカネだけのことではない、100年先、子々孫々の未来までをもしっかりと射程に収めて、町民全員の参加で、森と、そして森に暮らす多様性に富むたくさんの生き物との共存を図ろうとしているのです。

綾地域の取り組みは今後、ユネスコから世界に発信されます。そのメリットは大きいですが、調査保全活動責任も強まると、照葉樹林文化推進専門監の河野耕三さんは気を引き締めています。

納庫の山作業に参加して

長澤 勇吉

2014年山作業の仕事始めは、4月は27日。その日の状況を簡単に報告します。

安城歴史博物館駐車場にて本日の予定の打ち合わせをし、「道の駅 どんぐり」で小休止。名倉川を渡った空き地に乗用車を止め、軽トラックに乗り換えて林道を進みます。作業現場でヘルメット姿をかぶり、安全確認。間伐作業班と巻き枯らし班に分かれて作業開始。昨年見られた湧水が枯れていたのが少し気になる。事故防止に細心の注意を払って作業も順調に

進み、14時ごろに終了。

6月の第四日曜日は22日。鮎つりの愛好家の人たちがたくさん名倉川に出ている。納庫はまだ雨が少し残っていたので様子を見るため早めの昼食。この日は巻き枯らし作業に決定。幹の回りをチェーンソーで切って全員で皮をはぐ。梅雨時は面白いように皮がむける。皮をむいた立木は枯れてゆく。安全で効率的な間伐として取り入れている。

7月は、第2日曜日13日に実施。10月26日に計画している「巻枯らし間伐と植樹」イベントの準備作業。この日は立ち枯れした木を伐採。植樹場所を確保する作業。生憎雨が強く降り出したため、安全第一で作業は中止。駐車場で風邪を引かないよう着替えた。秋の植樹祭のエリアを皆で決めて帰路。本日も事故なく作業終了、感謝。

8月は、第四日曜日は面ノ木原生林観察会を実施したため、第5日曜日に定例の作業日に変更。面ノ木原生林観察会に参加された久保さん(女性)が初参加、みんな大歓迎。この日は、初めて導入のプラロックの使用説明を受けた。今まで立木を伐採するときにはロープを人力で引っ張っていたが随分楽で、安全面の確保もできる。間伐材の片づけも順調に進み、すっきり。

9月14日。春先から初夏に、雨が多く中止や半日作業を余儀なくされ、少し遅れ気味のため、臨時作業日。植樹場所の確保のための間伐作業。会場整備を心がけ、周りの枯れかかった木や細いのを選んで間伐。

10月12日 いよいよイベント準備最終日。この日は、林道の道路整備。ススキや張り出している枝木をカットしながら登る。道の状態は先の台風18号の影響は無く、ほっとする。作業開始前に米・塩・酒を山にまいて、山の神様に作業の安全を祈る。切った丸太は手ごろな長さに切って土止めに。そして古い積み上げた丸太も整理して、植樹スペースを確保。作業は14時に終了し、アグリステーション納倉に。イベントの日の食事と会場使用の確認。

イベントは、下働き大変であるが、みんな手弁当で参加。感謝するのみ。

面ノ木原生林の観察会に参加して

加藤由紀子

8月24日久しぶりに義理娘と孫の3人で、茶臼山山ろくの面の木峠の自然観察会に参加した。念のために雨具を準備したが出番の無い事を願う。

山への出発前にキララの森でお世話になったガイドの加藤さんより、今日のスケジュール等の説明があった。出発するとまもなく



ぱらぱらと雨が降り始めた。しかし大木の枝葉が傘となり私たちを覆ってくれて雨を感じない。森の深さを感じた。プレゼントした虹色のポンチョがうれしい



のか孫はルンルンではしゃいで歩く。

地面はしっとりとしつかふかで水はけも良く気持ちがいい。

参加者の中に長い髪が暑そうにまた、ズックをスリッパのように履きすぐに「心臓が飛び出る！！」と言いながら、ハアハアと登っては休みの繰り返しの婦人には、大丈夫かとハラハラで後ろからサポートする。半分くらい登った時汗をかき暑かったのか、孫が帽子を脱ぐとすぐに蜂がきて頭部にチクリ！大泣きとなる。でも母親が看護師の経験があり、頭の蜂の針を見つけるとすぐさま抜く。さすが！でもびっくりして泣き止まず。ガイドの加藤さんに薬を塗ってもらおう。その後私が山登りの訓練のリックと思い代わりに孫を背負う。滑らないように細心の注意を払い一步一步登った。頂上では苔むしたブナの大木が凜として待っていた。その幹の耳を当てて水音を聞く。そして加藤さんからメイプルシロップの採取の方法を聞いた。今後日本のかえでの木の必要性を声を大にして伝えていきたいと思った。孫を背負っての下山は大変きつかったが楽しくアットという間でした。

昼食中は雨が本降りとなり東谷の休憩所が大助かり。山菜おこわと五平餅の美味しい事。孫が一杯食べた。食後ガイドの加藤さんから手づくりのメイプルシロップのおやつを何度もお褒めした。

小降りになった雨を見て午後の散策を短縮して実施した。全員参加であった。午前は直線コースでしたが、午後にはかわいい草花を観察しながら山をぐるぐる回りながら登った。孫も転びつつも頑張ってみなについて登った。展望台は雲の切れ間から視界がわずかに見られたが次回のお楽しみと言う事になった。

今回のガイドの加藤さんの貴重な言葉。

山野草の持ち出し禁止はもちろんですが、この面の木は石ひとつ持ち出し持ち込みがされていず守られてきた山です。

山を守る人の意思の強さ、山への尊敬を忘れてはいけないことを教えてもらえ感謝した。今後の行動の指針にしたいです。

色々経験をさせていただいた孫も成長した事と思います。

有難うございました。

面ノ木原生林観察会に参加して

長澤 勇吉

8月24日、茶臼山のふもと面の木園地で、以前段戸の「きららの森原生林」の観察会のガイドをしてくれた、加藤さんのガイドで観察会に大喜びで参加。



出発時は曇り空。「アグリステーション名倉」に向かい、弁当と御幣餅（エゴマだれ）を車に積み込み、茶臼山への道を登って面の木園地へ到着。

広場に集合し神谷理事長の挨拶とガイドの加藤さんの話。加藤さんの案内で、頂上の天狗棚を目指して登り始めた。

初心者にもわかりやすい説明をしてもらい好評だった。木を植える場合、その土地に繁茂している木を種から育て、その樹木を植えなければならないと、自然を守るには、「持ち込まず、持ちださない」ことが原則ということが印象に残った。



今回の観察会は、山登りのようであり、何となく散歩の様に軽く考えて参加した人は、ややしんどい様子であった。

頂上に着くと標高1,240mの表示板があり、びっくり。1,240mと言っても車で900~1,000mくらい上がって来ていると、高さの実感がわからない。まるで散策コース。雨が降ったり止んだりでしたが、山道は深い木々の緑の葉がおおっているのので、雨が直接あたらない。天狗棚で長寿のブナの大木の説明を受け、長生きのご利益に授かりたく抱きつく人もいた。

広場横の東屋で楽しみの昼食。御幣餅が美味しい。ここで参加者を喜ばせるサプライズ。ガイドの加藤さんが、イタヤカエデから採集した自家製「シロップ」の試飲会が行われた。とんでもなく甘くみんな大喜びで、おかわりした人も。



昼食後、雨が強くなってきたが雨具をつけて、展望台まで、行く事に。全員参加となりその意気込みに感激。

天候が悪くて残念でしたが、名ガイド加藤さんのおかげで、山歩きなどしない人も自然を満喫でき、有意義な面ノ木原生林観察会でした。加藤さんの人間性豊かな心温まるガイドに、感謝・感謝です。

平成26年度の寄付者

本年度も以下の方々からご寄付をいただきました。水源の森を購入する資金に使います。ありがとうございました。

愛知造形社様	田中常和様	丸山光夫様	神谷俊治様
神谷 守様	大参支津子様	藤田勝己様	長澤勇吉様
長谷部正様	黒野篤夫様	ヤハギ緑化(株)様	香村直郷様
森下芳樹様	遠山松枝様	岡本真理子様	磯村洋子様